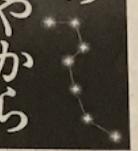


星陵の
学びやから

抗体という言葉を聞いたことがありますでしょうか？

2018年ノーベル賞の受賞内容には抗体に関するものが二つもあり、そのひとつが日本人の先生が受賞された「免疫療法」に関するものであつたことは、皆さんの記憶に新しいのではないかでしょうか。実は、その免疫療法に使われてい

抗体創薬研究分野教授

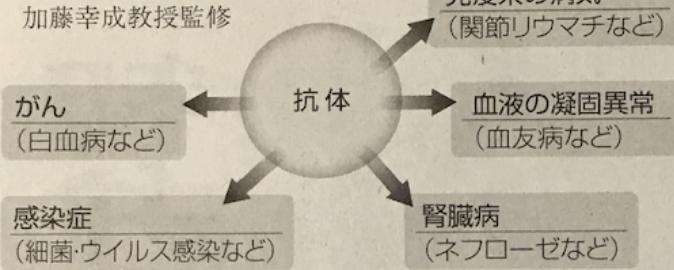
かとう ゆきなり
加藤 幸成さん

るのが抗体なのです。

抗体というのは、血液、唾液や母乳などに入つてゐる体の中のたんぱく質のひとつです。例えば、細菌

抗体はどんな病気を治す？

加藤幸成教授監修



が体に入つてくると、細菌に対する様々な免疫反応が起り、抗体ができます。

子供のうちに様々な予防接種を受けることによりたくさんの中の抗体が体の中につくられ、感染に強くなりま

す。インフルエンザのように、毎年、予防接種を受けないといけないものもあります。最近では、風疹のように、大人になつてから抗体ができていないことがわかる場合もあります。

このように、抗体は私たちの普段の生活にいろいろと関係しているのです。

私の研究室は抗体創薬研究分野という名前で、抗体を「創薬」する研究を日々行っています。創薬というの

は、薬をつくるということです。つまり、がん細胞は自らの細胞からできるだけを殺す抗体医薬をつくるのです。そこで私たちには、がん細胞だけを殺し、正常な細胞にはダメージを与えないような抗体医薬の開発を目指して日々研究しています。

このように、がん細胞だけを殺す抗体医薬をつくるのがどこからできてくるかをあらためて考えてみたいたいと思います。私たちの体内にある細胞は大変精密にコントロールされており、本來は増えてはいけない細胞が増えていくと、それがが

抗体を薬にがん治療挑む

ですから、「抗体創薬」というのは、抗体という薬をつくることになります。「あれ？」抗体は体の中でできるものではないのか？」と疑問に感じられたのではないかと思いますが、実は、

様々な病気を治すために、抗体が薬として使われているのです。これを抗体医薬と言います。私の研究室では、がん細胞を殺すための抗体医薬を生み出す研究開発を行つてゐています。

ここで、がん細胞というものがどこからできてくるかをあらためて考えてみたいたいと思います。私たちの体内にある細胞は大変精密にコントロールされており、本来は増えてはいけない細胞